

# 蛇造りの伝承

「安行原の蛇造り」の発祥について、文献資料などは残っていません。しかし、地元では戦国時代に原弾正という武将が安行原で戦って討ち死にしたことから、この霊を慰めるために始めたといわれています。また、霊が怨霊となり疫病や害虫となって地域に祟るのを鎮めるために始められたともいわれています。「ジガケ」という地名もここが古戦場であり、原弾正が戦のために陣を掛けた場所である「陣掛け」に由来するともいわれています。ただし、「ジガケ」の由来に関しては蛇をかける場所なので「ジャガケ」が変化したという説もあります。

以前、蛇が安置されていた樹齢600年の古木は、原弾正をここに葬った際に植えられたといわれています。顎を作るときに補強として組み込まれる木の枝は必ずこのケヤキの枝を使うことなどと定められていることから、この木が「安行原の蛇造り」にとって大切な存在であると分かります。

この「ジガケ」という場所は元々塚のようになっていたといわれています。塚とは土や石などを積み上げたり盛ったりしたもので、祭場や墓として作られてきました。そのため、この場所に原弾正が葬られたともいわれています。また、周囲よりも高くなっている場所は神が寄り付く場所と考えられてきました。これは山や巨木に対する信仰とも関係しています。塚もまた小さな山といえるので、元々この場所が地域にとって神聖な場所であったのではないかと考えられます。

蛇造りが行なわれる日の「5月24日」は、「ジガケ」に祀られている地蔵が関係しているという説があります。毎月24日は地蔵の縁日です。地蔵は釈迦入滅後に衆生を救うために現れた菩薩で、信仰が民衆へと広まっていく過程で境の神と習合し、村境に祀られて村を災いから守る神とも考えられるようになっていきました。

安行原の蛇造りは蛇への信仰だけでなく、討ち死にした武将の霊や古木への信仰、地蔵への信仰など多様な意味合いを含む行事と言えます。



安行原の「ジガケ」に祀られている地蔵と庚申塔